若きデューイのライプニッツ研究（I）

酒井　潔

はじめに

アメリカ哲学の「プラグマティズム」を代表する一人で、「道具主義」（instrumentalism）を標榜したジョン・デューイ（John Dewey, 1859-1952）が、その二十代の時期に「セント・ルイス哲学協会」に関係したり、またスピノザやカントを研究し、彼の師であるG・S・モリスを通じて、ヘーゲル主義にも接近していたという事実は、彼の「道具主義」や教育思想、あるいは後年の実際的諸活動に比べ、それほど知られてはいないであろう。しかしもっと知られていない事実は、二十九歳の若きデューイが『ライプニッツの人間知性新論―批判的解説』（*Leibniz's New Essays concerning the Human Understanding. A Critical Exposition*, Chicago 1888）と題して、三百頁近くにも及ぶ大部の著書を刊行していたことである[1]。ライプニッツ研究に新時代を画し、とくに英語圏の論理主義的ライプニッツ研究の先導となったとされるB・ラッセルの『ライプニッツ哲学の批判的解説』（*A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz*, London 1900）に十二年も先行している。しかも後者の本

文が二百頁余であるのをはるかに凌駕する力作でもあった。内容的にみても、デューイの解釈は、当時の英語圏のライプニッツ研究にも多く見られる反形而上学ないし経験主義の傾向に対し、むしろドイツ人の哲学者としてのライプニッツのおかれた状況とその動機や意図に理解を示している。そして、「有機的（organic）結合」、「内的（internal）関係」、「精神的（spiritual）原理」などの概念を中核としながら、ライプニッツの哲学体系をそのダイナミックな発展相において解明しようとした、（その限りでヘーゲル的、歴史主義的ともいえる）きわめて特色ある試みである。にもかかわらず、デューイ研究者はおろか、ライプニッツ研究者のあいだでさえ、デューイのこの『ライプニッツの人間知性新論―批判的解説』（以下、ライプニッツ書）は長い間ほとんど忘れ去られていたといえよう(2)。

そのうえ、このライプニッツ書は、デューイの一八八〇年代の他の諸論文ともども、彼の生前には結局再刊されないままに終わった(3)。しかしながら、ようやく一九六九年に John Dewey: The Early Works, 5 Vol. (Editorial Board: George E.Axtelle, J.A.Boydston, Carbondale- Edwardsville, Southern Illinoy Uni. Press, London/Amsterdam 1969) の、その第一巻 *Early Essays and Leibniz's New Essays concerning the Human Understanding* として、標記の時期に執筆発表された他の十九篇の論文と共に再刊されたのである（pp.253-435）。こうして同書の全貌が再びわれわれにも明らかとなったのである。

以下の小論では、まず第一章として、一八八〇年代の若きデューイの哲学活動のなかでこの『ライプニッツの人間知性新論』が成立したその経緯を歴史的発展史的に明らかにする。次に第二章において、同書の形態や構成、及び同書に展開されているデューイのライプニッツ解釈の内容を紹介し、それらの特徴について検討する。第三章では、ライプニッツ研究史における、デューイの特色とその意義及び貢献について考察する。その

場合にとくにラッセルのライプニッツ解釈との比較、もしくは対決を試みたい。そして最後に第四章として、若きデューイのライプニッツ研究と、その後に展開される彼固有の思想的立場との内在的、発展史的関係について、換言すれば、デューイのプラグマティズムの思想形成に対してそのライプニッツ研究が有した意味について考えてみたい。（なお、引用等は John Dewey: The Early Works, vol. 1 (1969) に依拠する）。

第一章　一八八〇年代のデューイの哲学修業と著作活動
―ライプニッツ書の成立にいたるまで―

一・一　『思弁哲学雑誌』への投稿

一八七五年にバーモント大学に十五歳で入学したデューイは、大学図書館の記録によれば、同年三月に『思弁哲学雑誌』（The Journal of Speculative Philosophy〔略記：JSP〕vol.I, 1867）を借り出している。一八六七年創刊のこの『思弁哲学雑誌』は、一八六六年にセント・ルイスで組織された「セント・ルイス哲学協会」（The St. Louis Philosophical Society）の機関誌であり、一八九三年の終刊まで、アメリカにおけるほとんど唯一の哲学雑誌として大きな役割をはたした。セント・ルイスには当時、一八四八年のドイツ本国の政治的社会的混乱を避けたドイツ移民が多く住んでいたが、彼らを中心に、ヘーゲル等のドイツ観念論に関心を寄せる在野の市民グループが同協会を結成したのだった。彼らは、大学という狭い枠にとらわれない、生き生きとした哲学運動を進めようとした。そのリーダーは、「ヘーゲルに拠るべし」と説いたブロークマイヤー（Henry Conrad Brokmeyer 1826-1906）とハリス（William Torrey Harris 1835-1909）であって、ハリスが『思弁哲学雑

誌』の編集を務めた。そして南北戦争後の混乱、科学の自然主義、宗教の伝統主義などを一挙に克服しうる哲学として思弁哲学に期待が表明されたのである。『思弁哲学雑誌』の精神としては、「〔アメリカ的思惟のトーンを高めるためには〕われわれは、古代や近世における最も深遠な哲学者たちに近づく便宜を〔アメリカに〕もたらさねばならない。すなわち翻訳と解説を用意することがわれわれの目的である」(4)と宣言された。したがって初期に出た巻の多くは、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルの著作の英語訳で占められている。それは、従来主としてイギリス哲学の伝統に依拠していたアメリカ哲学を多様化し、自立独歩させることにもなったのである。また、理性による宗教の哲学的基礎付けも意図されていた(5)。ちなみに、日本にヘーゲル哲学を本格的に紹介した最初の人はフェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908）であるといわれる。フェノロサはハーヴァード大学とその大学院において哲学を修め、最初スペンサーに心酔したが、その後『思弁哲学雑誌』を通じて知ったヘーゲル哲学に傾倒してゆく。彼が来日し、東京帝国大学哲学科で哲学を担当し始めるのは一八七八（明治十一）年のことである。ただし彼は一八七六年頃から美術史に関心を移しつつあった(6)。

さて、大学卒業後（一八七九年から）高校の教師をしていたデューイだが、一八八一年ペンシルヴァニア州オイル・シティから、躊躇しつつもハリスに原稿 *The Metaphysical Assumptions of Materialism* を送付し、その判定を仰いだ。ハリスの反応は好意的で、その論文は翌一八八二年四月『思弁哲学雑誌』第十六号に掲載された。以来デューイはハリスと親交を結び、続いて彼のデビュー作とも言うべき以下の三篇の論文が同誌上に相次いで発表されるのである。それらの論文とは、*The Pantheism of Spinoza*, JSP. vol.XVI, July 1882、*Knowledge and the Relativity of Feeling*, JSP. vol.XVII, Jan.1883、*Kant and Philosophic Method*, JSP. Vol.XVIII, April 1884 である。いま挙げた四篇はいずれも John Dewey, *The Early Works* 第一巻に収められている。

ハリスから受けた激励と援助は、デューイが大学院に進学して哲学の勉強を続けることを、さらに彼が哲学を生涯の仕事としするように決意するにあたり、決定的であった。

一・二　モリスとの出会い

デューイのライプニッツ書の成立、およびデューイの当時のヘーゲル主義を考える上で、もう一人看過できない人物がモリス（George Sylvester Morris, 1840-1889）である。一八八二年から八四年までデューイはジョンズ・ホプキンス大学大学院に在学する。そして一八八四年には学位論文「カントの心理学」（*The Psychology of Kant*）を提出する。このとき彼はモリス教授のもとでドイツ哲学史、とくにライプニッツを学んだのである。同じ頃デューイはまた当地の Metaphysical Club において *Hegel and the Theory of Categories* などの論稿を発表したりもしていた（1884.4.10）。モリスはドイツ留学時にトレンデレンブルクの影響を受けた。モリスはまた、ヘーゲル右派を自任し、ライプニッツ著作集（Opera philosophica omnia, 1840）を編集・刊行したエルトマン（Johann Eduard Erdmann, 1805-1892）にも一八八五年にハレで会っている。モリスは当時の英国に見られた功利主義や経験主義の傾向に反対し、アメリカにおけるヘーゲル主義の旗手であった(7)。デューイは一八八四年に学位を取得した後、ミシガン大学においてモリスの助手になり、一八八六年にはモリスの主宰する哲学科の助教授に昇進する。ここに至りモリスは、自らが主宰する「ドイツ哲学古典叢書」（全八巻）のなかでまだ決まっていなかった「ライプニッツ」の巻について、その執筆者としてデューイを推挙した(8)。この叢書の正式な名称は、German Philosophical Classics for English Readers and Students である。出版社であるシカゴの S.C.Griggs and Company はもともと大学教科書を主とし、文学、歴史、科学書等を出版していたが、一八八〇

年から一八八六年にかけての時期には、哲学を第二番目に大きなジャンルとしていた。同社は、一八八七年から一八九六年にいたる間には、デューイのライプニッツ書も含めて計四二点を出版し、その中では哲学書が優勢であった。そしてデューイが執筆者に指名されてから僅か二年目にあたる一八八八年には、早くも彼の『ライプニッツの人間知性新論』は完成し、叢書の第七回配本として刊行されたのである(9)。

ちなみに、デューイの執筆活動が多産になるのは、ちょうどこの一八八六年からであるが、それは、同じ時期に彼がタイプライターの使用を始めたこととも関連がないわけではないらしい(10)。

一・三「ドイツ哲学古典叢書」について

モリスの主宰する本叢書は、その全八巻の編集方針として次の四点をあげていた(11)：

一、「批判的解説」（critical exposition）であること(12)

二、明晰で魅力的な陳述を提供すること

三、哲学的探究の歴史的な、かつ承認された結果へ言及すること

四、いかなる仕方で、ドイツ思想は、イギリスの思弁への補完、矯正を含むのかを示すために、歴史的な考察とは別に、長所や短所について独立の価値評価を下さねばならないこと。

いまデューイのライプニッツ書の内容を先取りして見るなら、デューイは上記のモリスの編集方針にきわめて忠実に彼の分担をはたしたことが確認できる。すなわち、ライプニッツは、ロック等のイギリス思想の典型と対決したドイツの哲学者としてアプローチされており、さらに経験論や唯物論の形式主義硬直に対置して、デューイ自身の積極的な評価がライプニッツに繰り返し与えられている。テクストに丹念に当たり、コンテク

ストに配慮して内在的な評価を試みたデューイの叙述は、その平明な文体ともあいまって、叢書の意図をよく実現し得ているのではないだろうか。

ところで、一八八九年モリスが急逝した際には、デューイは叢書の最終巻に予定されていたハリスの『ヘーゲルの論理学』（*Hegel's Logic*）の編集・指揮を委託された。デューイはこの巻についても、翌一八九〇年は出版にこぎつけ、モリス、そしてハリスの年来の温情に報いた。

第二章　デューイのライプニッツ解釈

二・一　デューイ著『ライプニッツの人間知性新論』について

［二・一・一］　まず本書の題名は、本書が数多くのライプニッツの著作のなかでもとくにその『人間知性新論』を取り上げるということを端的に示している。そうしたデューイの選択の理由としては、さしあたり次の二つの点が考えられよう。第一に、思想的内在的な理由があるだろう。周知のように『人間知性新論』（*Nouveaux essais sur l'entendement humain*, 1703）は、英国哲学の経験論の伝統を体現しているロックの『人間知性論』（*An Essay concerning the Human Understanding*）に対する、ライプニッツの立場からの主題的、直接的、逐一的な論駁書である。ゆえに、これを取り上げることにより、反経験論・反唯物論のドイツ哲学の典型、つまりヘーゲル哲学にいたる発展の基本性格を示しやすいと思われたからであろう[13]。第二に、外的あるいは歴史的な事情がある。一八六七年七月『思弁哲学雑誌』創刊号にF・H・ヘッジによる『モナドロジー』の最初の英語訳が発表され、デューイは直ちにこれを読んだが[14]、しかし同英訳は一般にはあまり反響を呼ばなか

った。そして他のライプニッツ原典の英語訳も依然として皆無に近かった。しかるに、モリスからデューイに対してライプニッツ書担当への推挙があったその前年の一八八五年七月に、A・G・ラングレイが『人間知性新論』の初めての英語訳を『思弁哲学雑誌』に、いくつかの部分に分けて、発表し始めたのである[15]（それらはまもなく一巻に纏められ、一八九六年に出版された）。英語圏のライプニッツ研究が当時にいたるまできわめて低調だった理由のひとつに、フランス語とラテン語の習得が困難だったことがあげられているが、デューイはその両方に堪能でもあった。デューイ自身は、『人間知性新論』のテクストとして、エルトマン版ライプニッツ著作集（Opera philosophica ominia）所収のフランス語原文に依拠していたから[16]、英語訳の有無にはほとんど左右されなかったであろう。しかしともかくこのラングレイの英語訳が『思弁哲学雑誌』に発表されたことは、同誌の読者デューイにとって少なからず刺激を与えたに相違ない。

［二・一・二］　さてデューイの本書『ライプニッツの人間知性新論―批判的解説』を実際に読み進んで行くと、それが必ずしも『人間知性新論』だけの解説や注釈にとどまらず、それ以外の著作、すなわち『弁神論』、『モナドロジー』、『理性に基づけられた、自然と恩寵についての諸原理』、『クラークとの往復書簡』等からもふんだんに引用されていることがわかる[17]。デューイは教授法的な配慮も交えながら、ライプニッツの哲学思想の全体的な特徴を分かりやすく説明しようとしているのである。この点についても、“Science”と“Mind”の両誌において好意的な反応を得た。例えば、後者における匿名の新刊紹介によれば、デューイの目は同時に、ロックに典型的に示されている説と、そしてライプニッツに典型的に示されている説―これらはライプニッツの『人間知性新論』では必ずしも常にそれとして明記されているわけではないが―との双方に向けられている、と評価されている（*Mind*, XIII, oct. 1988, p.612）。ただし、後に触れるように、デューイのこの書には引用箇

所や引用テクスト等の記載はない。そのため、一九六九年の John Dewey: The Early Works の編集者は巻末に詳細な“Checklist of References”を付している。

右に触れた点、つまりライプニッツの単に一つのテクストの解釈にとどまらず、ライプニッツの哲学思想の全体像をバランスよく紹介するという配慮は、この『ライプニッツの人間知性新論―批判的解説』の内容目次を瞥見しても確認できる：

第一章「人間」　（哲学者ライプニッツについての簡潔で要を得た伝記）
第二章「彼の哲学の諸源泉」
第三章「問題、及びその解決」

つまり第一章から第三章までは、明らかに、ライプニッツ哲学全体との取り組みを意図しているのである。したがって本書は、アメリカでは最初の、そして英語圏全体でもほとんど最初の、〈ライプニッツの生涯と思想〉についての入門・解説書になっているともいえよう。

第四章「ロックとライプニッツ―生得諸観念」
第五章「感覚と経験」
第六章「衝動と意志」
第七章「物質及びその精神への関係」
第八章「物質的諸現象とそれらの実在性」
第九章「いくつかの基礎的な諸概念」
第十章「知識の本性と範囲」

第十一章「ライプニッツの神学」
第十二章「批判と結論」

二・二　『ライプニッツの人間知性新論』各章の概要

それでは次にデューイのこのライプニッツ書各章の内容について概要を見ていこう。その場合、他の多くのライプニッツ・モノグラフィーには見られないような論点を主に取り出して、そこにまたデューイ自身の立場や哲学観の特徴も遺憾なく発揮されているということを、浮き彫りにするように試みる。

まず第一章「人間」では、青少年期のライプニッツが、少なくとも哲学に関しては「独学」だった点をデューイが高く評価しているのが注目される。すなわち、ライプニッツはそのように「自由」だったからこそ「自己発展」（self-development）の観念を得たのであり、また、デカルトなどと違って、伝統的教育への反対などをわざわざ表明する必要もなかった。ライプニッツの思惟の連続性は、個体モナドの段階的発展の、その生きたモデルであった、とデューイは言う[18]。さらにまた、ライプニッツが、哲学に適した言語としてのドイツ語に注目していたことや、ドイツの帝国内の団結を促したことにもデューイは言及し、ドイツの哲学者としてのライプニッツの側面を強調している。

次に第二章「彼の哲学の諸源泉」では、デューイは、ライプニッツは哲学の「歴史」への関心において同時代人に例を見ないほどであり、―自然科学ではライプニッツの先行者も後続者も多々存在したが―、二百年は進んでいたと述べ[19]、合理主義という方法が、その適用においては常に彼の歴史的考察によって制御されているところにライプニッツの特色を認める。デューイによれば、ライプニッツの受けた影響のなかでは「生物学」

が、機械論や数学にもまして最も重要だが、彼の「生命」や「有機体」の概念はむしろ彼自身の形而上学からきている。なおも注目すべきことに、デューイは「運動」（motion）概念に関して、哲学は「事実」（fact）のその意味を知らねばならない（仮にそれが究極の事実であっても）と言う。そして「力」（force）や「活動性」（activity）の概念（これらはさらに「生命」に基づいている）を強調するのである。

第三章「問題、及びその解決」では、デューイは、ライプニッツが時代の諸問題を総合する場合、それは単なる継ぎ接ぎではなく。つねに経験ないし実在の「統一」への探究によって導かれていた、と見る。スピノザの唯一実体説は、ライプニッツには多様性や差異の切り捨てだと思われたから、まさに個を個として生かしつつ、宇宙とどのように調停するかが課題となる。まさにこのような統一の原理がモナド概念であって、その統一は精神的（spiritual）なそれである。デューイはライプニッツの差異・多様性の哲学に賛同する。

ところでモナドは個別的存在だが（但し、表出されている内容は普遍・法則・世界であり、個々のモナドにとって共通の対象である）、同時にしかし全体的秩序に組み込まれている。デューイも、ライプニッツとともに「宇宙」を関係、あるいは法のネット・ワークと見る。興味深いことに、無窓的モナドの相互独立性という性格に基づいてデューイは、個と普遍、個の尊厳と個による法の代表というような事態を、「真の民主主義」のモデルとして解釈する可能性を示唆している[20]。この世界には「予定調和」が支配しているといわれるが、宇宙は取りも直さず調和しているのだから、「予定された」というのは本来不必要な修飾語であろう。強いていえば、それは「存在的」（existent）と同義である。「調和」は単なる想像の表現ではなく、確かな事実の表現なのである。さらにデューイは、モナド世界の表出関係に「有機的」（organic）という性格を付与する。デューイの解釈の特徴は、世界−内−存在する諸モナドを interorganic member of system と解し、そのなかでも意

識をもつ人間に応分の地位を認めるという点にも見出されるであろう。

第四章「ロックとライプニッツ―生得諸概念」では、始めに、「批判」という概念に関して、デューイは、今日よく見受けられるような、前提と帰結との論理的整合性だけを問題にするような批判ではなく、ライプニッツが実践したような、自らの体系的な立場からの批判を行うのだと宣言する。ロック（あるいはニュートン）の経験論・知覚因果論的な考え方はアングロ・サクソンに馴染んだもので、これへのライプニッツの論駁はまさに英独宿命の対決である、とデューイは述べている。生得観念を否定するロックでは「知覚とは意識されてあること」だとされるが、ライプニッツは観念を、むしろ表出する心の活動性と解し、観念の先在は、われわれが実際にそれに気付くと気付かぬとにかかわらず確かなことであると主張する。このときデューイがライプニッツの方に共感していることは明らかである。

第五章「感覚と経験」では、冒頭、デューイは自らの哲学観として、感覚（sensation）は自然世界と魂の国との境界線上にあり、したがって科学の進歩と哲学の進歩は感覚についての教説に変化をもたらさずにはおかない、と述べている。ロックでは精神を受動的と考えるのに対し、ライプニッツでは、精神は活動的モナドであって、自らの内に世界を表出＝鏡映するのだとされる。さらに、ロックでは感覚と知性（understanding）とは「外的」な関係にあるが、ライプニッツでは、知覚は一における多の包含であり、そして知覚が判明になり、気付かれると感覚になって行く。観念は第一次性質と第二次性質という差別なしに対象を表出している。つまりライプニッツは度合い、または程度的な見方を導入することにより、感覚（混雑した観念を所有している状態）と経験（そうした混雑観念の連合）との差別を克服している。「因果性」（causality）は物理学にのみ妥当するのであって、観念（idea）の場面に使用されてはならない、ともデューイは指摘している。

第六章「衝動と意志」では、まず、精神の“state”なるものはなく、ただ“tension”＝“pushing forward”があるのみであり、そしてideaは必ずvolitionである、というデューイの優れた解釈が示される。ここでもライプニッツの程度的、漸進的な見方にデューイは共感している。意識的行為を決定する（あるいは無意識的衝動impulseから意識的欲求desireへ移行する）諸要素からその選択に至るネット・ワークは複雑だが、そこに働いているのは機械的必然ではない。デューイは「偶然性」を「自発性」と同義とみなす。そしてこの自発性が、意識された行為と目的との結合のなかで道徳的内容を得るのだ、とデューイは言う。さらにそのようなライプニッツの議論は道徳と理性と自由の統一というプラトン的な立場に近い、ともデューイは指摘するのである。

第七章「物質及びその精神への関係」ではデューイは、ヴォルフによるルクレティウス的あるいは通俗的なモナド理解を退け、モナドはまさに「思惟される実体」であって、可感的な物体でも、物質の直接的成分でもないと強調する。モナドは物質のむしろfundamentumなのであって、そういうモナドをして物質を構成させるものはそれの受動性だとする。つまり、モナドが他のモナドとのidealな相互作用のなかで他者から限定されてくることの、その表現こそ「物質」なのである。逆にいえば、organic connexionという思想が物質＝受動性を要求する、とデューイは言う。物質は、精神または観念の現象であり、顕現であるから、それ自身は精神に対立するものではない。物質の活動の源泉は、精神のspiritualな自己活動なのである。

第八章「物質的諸現象とそれらの実在性」でまず注目されるのは、謂わば先に二つの物体があり、その後に運動（motion）の過程（process）が生じるというのではなく、二つの物体は運動という同一のシステムにおける二つの要素であるとして、デューイがシステム理論的ないしはホーリスティックな物体論・運動論を示唆している点である。さらにデューイは物質的世界を、徹底して相対・変化・交替の世界と見なす。絶対的に安

定した物体というものは無く、したがって不可分な物体すなわちアトムも有り得ないのである。そして無限な環境のエネルギーの中心としてアトムをとらえなおす新しいエネルギー説をデューイは引き合いに出す。諸物体の離在や自存は、それらの全体への関係に基づけられる。さらに、物体相互の関係としての空間と時間（これに対して延長と持続は現実的な個々の物体に係わる）の観念性ということ（これがライプニッツ対クラークの論争主題の一つであったことは周知の通りである）についてもデューイは次のように論じている。すなわち、われわれの経験は細切れなだけではなく、いつでも或る一定の秩序をもつ。われわれに自然的対象の reality を結論せしめるものは、そういう秩序の恒常性と規則性なのであって、この秩序は、永遠真理として、神の知性の中にそれの観念的な真理性を有し続ける。この問題こそ若きバークリのものと同じである、と。

第九章「いくつかの基礎的な諸概念」では、まずロックの「実体」（substance）概念が批判される。もしロックの言うように、実体とは不可知の基体だとすると、われわれは実体そのものを知ることはできず、ただその現象＝偶有を知るのみという帰結に陥る。だがデューイは、ライプニッツではむしろ逆に実体こそ具体的であり、偶有（性質）こそ抽象的なのだと強調する。だから個体化の原理はただ「内的」で、個体の全体に関わるものでなければならない。デューイはさらに、個のリアルな同一性は諸知覚の連続的連結であるとして、ライプニッツのモナドの「同一性」は実体のそれでもなく、心的状態に伴う意識でもなく、むしろカントのいう綜合統一にあたると指摘する。そして、自己とは経験の抽象的な統一ではなく、最も organic な統一だと言うのである。「精神的」（spiritual）ということの意味については、それは「可感的なもの」の、その activ で organic な土台、意義、または目的のことであり、dynamic という性格に基づいているのだ、というデューイの特徴ある解釈が提示されている。

第十章「知識の本性と範囲」では、まず「「知識」は観念の一致・不一致の表象である」というロックの定義が批判される。デューイによれば、ロックでは「観念どうしの一致」と「観念と対象の一致」ということが混同されており、この混同を除去することがバークリの課題でもあった。つまり「現実存在」は、観念と（知られざる）対象との一致などではなく、むしろ観念そのものの中に求められて行くようになる、とデューイは見る。こうして、reality を形成するのは客観と自我との協同であるという洞察において、ライプニッツはすでにカントを先取りしている、とまでデューイは評価するのである。さらに、デューイの判定によれば、ロックの困難は、「知る精神」と「知られた宇宙」との organic な unity を認めず、むしろ両者を分断したがために不可知論に陥ってしまったことによるのだという。科学の目的は個別のデータにではなく、それらの dynamic な統一としての「個体」にこそ存する。個体性は、ロックの言うような simplicity などではなく、逆に一切の関係の結合である。それは認識の材料または端緒などではなく、むしろ認識のゴールである。同時にまた、宇宙の連関を発見する程度に応じてわれわれは可感的経験を合理化することができる。そしてデューイは、知識の最終段階として、自己知（self-consciousness）をあげ、これこそがわれわれ人間の知性が神の知性と同一であることの認知なのだ、と言うのである。

第十一章「ライプニッツの神学」では以下の三点が注目されよう。まず第一には、デューイの判定では、ライプニッツは自然-法と自然-道徳を切り離すことにより、当時のドイツの倫理学にひとつの基礎的な形式を与えたのだとされる点である。第二に、デューイによれば、ライプニッツ思想の（再）発見は、一つには、法律・慣習・実定法から独立した道徳の学が存することの、もう一つには、自然的・実定的道徳の共通の基礎が、単なる神の意志ではなく、永遠真理を内容とした理性を伴うということの（再）発見である、という点である。

そして第三には、この章の終わりに、デューイが the instrumental という語を用いて、精神が自然を完成するのは、それが自然を道具とすることにおいてであり、そして自然をたんなる物質的力の受動的パノラマにせずに、正に生きた精神の顕現となすということにおいてであろう、と言明している点である(21)。

最後の第十二章「批判と結論」では、その冒頭でデューイは、批判を行う際の態度として自分は内在的な解釈を行うのだという旨を改めて確認する。そのうえでデューイは、ライプニッツに見出される最も基本的な矛盾とは、彼の採用した方法、すなわちスコラの形式論理（矛盾律、同一律）と、彼が掲げた主題、すなわち方法がそれに適用されるはずの思想的態度（科学的思考からくる「相互」や「関係」の観念）との間の矛盾だと強調する。つまり論理学に従えばモナドは孤立するが、しかし観念的な次元ではモナドはその鏡映作用により全宇宙と連関している。かくて、この双方を調停せんがために Deus ex machina が必要となってしまったのだとデューイは述べている。デューイの見るところ、誤りはライプニッツの個体主義にではなく、「個体」の概念そのものに潜んでいる。つまり、いかにして神＝普遍から個＝差異が帰結し得るのかの説明がライプニッツでは困難と言わざるをえない。そこでデューイは、差異ということのリアルな原理としてヘーゲルの「否定」概念を高く評価するのである(22)。

この章の終わりにデューイは、カントはヒュームの警告によってライプニッツ哲学の方法ばかりか、そのモチーフまで棄てたかのように見做す解釈があるが、そのような解釈は偏向していること、そしてむしろライプニッツは、ヘルダー、レッシング、ゲーテなどに連続して行く面を持ち、カントの先駆者であることを強調している。

（第二章　終。以下、次号に続く）

〔次号掲載分目次〕

第三章　デューイのライプニッツ解釈の特徴とそのライプニッツ研究史上の意義
第四章　デューイの哲学的立場とライプニッツ書
結　語

〔付記〕

本稿の原型は、その一部が日本デューイ学会関西地区例会（一九九三年一二月一一日於岡山大学教育学部）において口頭発表されたものであり、その短い要約が『日本デューイ学会紀要』第三五号（一九九四）に掲載されている。この度初めて論稿を公表するにあたって、全面的に手を入れ、加筆・修正を行った。また、一九九六年に発表されたマルヴァニの論文 *Robert J.Mulvaney, Frederic Henry Hedge, H.A.P.Torrey, and the Early Reception of Leibniz in America*, in: Studia Leibnitiana, XXVIII を参照し、若干の事項を補った。

ただ紙幅の制限のために、やむなく、第三章以下については本誌次号（二〇〇五年）に掲載することにした。

マルヴァニの上記論文は、今日ではほぼ忘却されたヘッジとトーリーを中心とした十九世紀後半期アメリカにおけるライプニッツ受容について、多くの資料を駆使して、彼らのライプニッツ研究が有していた特徴を精神史的文化史的背景も交えながら明らかにしている。ヘッジやトーリーの精神主義、反感覚主義、『弁神論』への注目、あるいは彼らにおけるヘーゲルまたはカントの肯定的受容など貴重な指摘を多く含む。ただデューイについては Vermont transcendentalism や American personalism に属するトーリーと、その弟子デューイとの関係に言及するに留まり、デューイのライプニッツ書への言及は全くない。一九八七年のレイトナーの論文 Sidney Ratner, *John Dewey's Critique of Leibniz and Locke*, in:Studia Leibnitiana, XIX 1987 は、デューイ研究の視点からデューイのライプニッツ書を、その内容に立ち入って考察し、デューイの後の思想発展に、ライプニッツの有機体論的な、そしてロックの心理学的経験論的な実在論が影響を及ぼしたと結論する。しかしデューイのライプニッツ研究を十九世紀後半のアメリカ哲学の地盤に置いて見るという視点はない。

私は小論において、当時のアメリカのドイツ哲学、あるいはライプニッツ哲学にかかわる受容史的、そして精神史的状況のなかから、デューイのライプニッツ書がどのように成立したのか、そしてまたデューイは『人間知性新論』をはじめとしたライプニッツ原典を読みつつ、ライプニッツの思惟にどのように向かい合い、これと対決し、自らの独自の立場を構築する発想を懐胎していったのかを明らかにしようとした。

注

(1) German Philosophical Classics for English Readers and Students, edited by George S. Morris. *Leibniz's New Essays concering the Human Understanding. A Critical Exposition*, by John Dewey, Chicage, S.C.Griggs and Company 1888. pp. i-xvii (contents, preface) + pp. 1-272.

(2) *Leibniz-Bibliograhie.Die Literatur über Leibniz bis 1980*., begründet von K.Müller, hrsg.von A.Heinekamp, Frankfurt a.M. の初版（一九八〇）にはデューイの本書は収録されていない。またデューイ研究者も、デューイのそのライプニッツ研究ばかりか、およそ過去の哲学者の学術的研究に無関心であったという点を Sidney Ratner, *John Dewey's Critique of Leibniz and Locke*, in:Studia Leibnitiana, XIX 1987 が詳説している。

(3) 出版された一八八八年に国会図書館 (Library of Congress) に二部が届けられたが、それも後に失われたのである。ただし、一八八八年の初版本のリプリント版が一九六一年に五百部だけ印刷され、Hillary House Publ. Ltd. New York から刊行されている。ただし、初版本の冒頭に印刷されていた「ドイツ哲学古典叢書」としての扉表紙、及び叢書の既刊案内等は除かれている。

(4) Muirhead, J.H., "*How Hegel Came to America*", in: The Philosophical Review, vol. XXXVII, 1928, pp. 226-240.

(5) The Journal of Speculative Philosophy, vol. 1, 1867, p. 1 ("To the Reader" by Editor).

(6) 酒井修「へーゲル哲学の本邦渡来―その『論理学』の研究のために―」（京都哲学会編『哲学研究』第五五五号、一九九〇年、二一～二二頁、三九～四〇頁参照。

(7) G・ダイキューゼン著、三浦典郎・石田理訳『ジョン・デューイの生涯と思想』（清水弘文堂、一九七七年）参照。

(8) カリフォルニア・パーソナリズムに属し、ライプニッツを崇敬していた Gerge Holmes Howison が『叢書』のこのライプニッツ巻の執筆を切望していたという事情をマルヴァニが紹介している。Robert J.Mulvaney, *Frederic Henry Hedge, H.A.P.Torrey, and the Early Reception of Leibniz in America*, in: Studia Leibnitiana, XXVIII 1996, p.179.

(9) デューイの本書 (The Early Works, vol. 1) 巻末に Jo Ann Boydston が付した A Note on the Texts を参照。

(10) 山田英世『J・デューイ』清水書院、一九六六年、六四頁以下参照。

(11) デューイのライプニッツ書（一八八八年）の扉裏に印刷された「ドイツ哲学古典叢書」の案内には、モリスの責任編集のもとで「ドイツ思想の傑作を批判的に解説する」ために刊行された七巻が挙げられている。書名と著者名を掲載順に紹介しておこう。

Kant's Critique of Pure Reason, by G.S.Morris
Schellings's Transzendental Idealism, by John Watson
Fichte's Science of Knowledge, by C.C.Everett
Hegel's Aestheticsm, by J.S.Kedney
Kant's Ethics, by Noah Porter
Hegel's Philosophy of the States and of History, by G.S.Morris
Leibniz's New Essays concerning the Human Understanding, by John Dewey

（なお、デューイのライプニッツ書の次に予定されていた最終巻 W.T.Harris, *Hegel's Logic. On the Genesis of the Categories of the Mind. A Critical Exposition* については、まだここでは予告されていない）。

(12) デューイの本書「序文」にも言明されている。Dewey, p.253, Preface.

(13) "I have also endeavored to keep in mind, throughout, Leibniz's relations to Locke, and to show the *Nouveaux Essais* as typical of the distinction between characteristic British and German thought" (p.254, Preface).

(14) Mulvaney, op.cit., p.179.

(15) Preface, Bk.I, ch.1, in Journal, vol.XXI, July 1887.
Bk.I, Chs.2-3, in Journal, vol. XXI, July 1887.
Bk.I, Chs.1-2, in Journal, vol.XXI, Oct.1887.

New Essays, New York/London 1896.

（16）当時ゲルハルト版の『人間知性新論』が出たばかりだったが、デューイはエルトマン版を使用した。Mulvaney, op.cit., p.174.

（17）しかるにレイトナーは、『弁神論』について触れていない。Ratner, op.cit..

（18）Dewey, p.258, (Ch.I:“The man”).

（19）Op.cit., p.271, (Ch.II:“The Sources of His Philosophy”).

（20）Op.cit., p.295, (Ch.III:“The Problem, and Its Solution”).

（21）Op.cit., p.413, (Ch.XI:“The Theology of Leibniz”).

（22）Op.cit., p.420, (Ch.XII:“Criticism and Solution”).

（哲学科　教授）

Zusammenfassung

Das Leibnizbuch des jungen Dewey

Kiyoshi Sakai

In Kontrast zu seinem späteren Instrumentalismus-Gedanken ist bisher nicht so sehr beachtet worden, dass Dewey in seinen zwanziger Jahren Spinoza und Kant studiert und sich dem damals in Amerika einflussübenden Hegelianismus angenähert hatte. Aber noch weit unbekannter geblieben ist die Tatsache, dass der junge Dewey im Rahmen der von G.S.Morris herausgegebenen, achtbändigen Reihe, “German Philosophical Classics for English Readers and Students”, ein ganzes Buch über Leibnizsche Philosophie veröffentlicht hatte: John Dewey, *Leibniz’s New Essays concerning the Human Understanding. A Critical Exposition* (Chicago 1888). Dieses fast dreihundertseitige Werk erschien noch zwölf Jahre vor jenem bahnbrechenden Buch von B.Russell, *A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz*. Deweys Interpretation gilt als ein origineller Versuch, gegen die antimetaphysiche, empiristische Tendenz in der damaligen, englischen Philosophie doch die metaphysischen Komponente von Leibniz selbst zu thematisieren und solche Begriffe wie “die organische Verbindung” oder “das spirituale Prinzip” in einem dynamischen Entwicklungsaspekt klarzustellen. Aber eine zweite Auflage seines Leibnizbuches kam in seiner Lebzeit nicht mehr zustande. Erst 1969 ist es, zusammen mit seinen anderen neunzehn Aufsätzen, im ersten Band von *Dewey: The Early Works*, 5 volumes wieder veröffentlicht worden.

Es gibt wohl zwei Gründe, warum die *Nouveaux essais* als Thema besonders gewählt wurden, lassen sich wohl zweierlei berücksichtigen: Erstens, die gegen Locke gerichtete *Nouveaux essais* standen für den Typus der antiempiristischen, deutschen Philosophie. Zweitens, A.G.Langrey hatte gerade 1885 damit angefangen, seine erste englische Übersetzung der *Nouveaux essais* in der damals in America einflussreichen Zeitschrift, “Journal of Speculative

Philosophy”, zu veröffentlichen. Jedoch bezieht sich Dewey in diesem Buch auch auf andere Leibnizsche Schriften wie *Théodicée* oder *Monadologie*, und er fand in den Rezensionen jeweils gutes Echo.

Es kann zwar an diesem Leibnizbuch kritisiert werden, dass es etwa keine Stellen- bzw. Literaturangaben gibt. Ausserdem wird seine organistische, antilogische Interpretation bald durch jenen panlogistischen Trend von Russell oder Couturat ersetzt. Trotzdem lässt sich in Deweys Einsichten nicht weniges finden, was zur Leibniz-Forschung beitragen könnte: Ein ausgezeichnetes Beispiel wäre, dass er sich als den konkreten Inhalt der Verschiedenheit zugleich Übereinstimmung unter den Monaden auf das Verhältnis der “Souveränität der Bürger” zum “Recht” bezieht, um darin einen politisch-sozialphilosophischen Aspekt der Monadologie aufzuschliessen.

Die in Deweys Leibnizbuch oft auftauchenden Schlüsselworte sind wie folgendes: “organic”, “relation”, “spiritual”, “ethical”, “unity”, “life” etc. Diese widmen sich nicht bloss seiner Auslegung des Monadenbegriffs. Sondern sie gehören schon zu den systematischen Begriffen, mit denen Dewey später seine eigene philosophische Position konstruieren wird. Die Natur, die nichts anders ist als der ursprüngliche Zusammenhang von Lebewesen, steht nicht den Menschen gegenüber, sondern sie ist das Moment für Selbstüberwindung des geistigen Wesens, oder das “instrument”, so äußert sich Dewey in diesem Buch (cf.p.413). Es lässt sich also sagen: Die Bedeutung des Leibnizbuches oder der Reihe seiner philosophiegeschichtlichen Studien in 1880er Jahren erschöpft sich keineswegs etwa in einer Ideenwanderung des noch unreifen Dewey oder in einer Widerspiegelung der damaligen sozialen Situation (z.B. zunehmende deutsche Einwanderung und Zufluss der deutschen Kultur und Gedanken). In ihm sind der reiche Geschichtssinn und die Vorstellungen wie Kontinuität, Entwicklung und Veränderung der Existenz zwar noch in Keimen aber sicherlich konzipiert, woraus auch sein positives Interesse an der deutschen Philosophie wie Leibniz, Kant, und Hegel letztlich entstanden war.